

ぐ どう
弘道

檀信協だより

発行 日蓮宗埼玉県檀信徒協議会
〒349-1101 栗橋町北2-5-12 (吉田卓治方)
TEL (0480) 52-0015

荒行成満大祈祷会

私の信仰談 北本市 善照寺 鈴木清子さん 3面
大聖人・彩の国紀行 戸田市 妙顕寺 5面



日蓮宗埼玉県修法師会主催の平和祈願大法要並びに大祈祷会が、六名の行僧を迎え児玉町の玉蓮寺で開催され、悪天候の中、約二〇〇名の僧俗が参列し厳修された。

本堂で厳修された平和祈願大法要並びに大祈祷会

昨年度からはじめられた青年会員による唱題行脚が、午後一時に玉蓮寺を出発し、十六名の青年僧が隊列を組み児玉町内約三キロの行程を一心に団扇太鼓を撃鼓し、お題目を唱えながら行脚した。雪混じりの悪天候のため道行く人は少なかったが、お題目を町中に響き渡らせ、一時間後行脚隊は玉蓮寺に戻った。行脚隊の帰還を待ち、僧俗打ち鳴らす団扇太鼓とお題目で今年度



児玉町を行く青年会行脚隊

平成十七年二月十九日、児玉郡児玉町玉蓮寺において、平成十六年度大祈祷会が行われた。当日は朝から雨が降るあいにくの天気となったが、僧侶・檀信徒合わせて約二百名が参加した。

大荒行を成満した六名の加行僧が本堂前に整えられた水行場に姿を現した。用意された六つの水桶には、満々と水が張られ、水行肝文を唱え米もほりそうな冷たい水を手桶に汲んで水行を行った。冷たい雨が降りしきる中、水をかぶった行僧から立ち上る湯気と、飛び散る水しぶきに見学した檀信徒は驚きの声を上げ、氣迫あふれるその姿に皆感激した様子で一心に手を合わせていた。



成満僧による水行

その後本堂に移り、埼玉県法華和讃奉詠会二十一名による和讃の水行と対比し、美しい唱和の中に大聖人への敬慕の念が感じ取れる歌声でした。

法華和讃の奉詠



続いて、身動きがとれないほどの檀信徒で埋め尽くされ、歴史で荘厳された本堂で、加藤貴和修法師会会長を導師に世界平和祈願大法要並びに大祈禱会が厳修された。県内の修法師総勢二十三名による読経と木剣の音が、昨年からの年にかけて起こった天変地異を沈めるかのように響き渡る修法の迫力に参加者は一心に手を合わせ、参加者全員で唱えるお題目の声にも力が漲っていた。

ついで、参加者に加持祈禱が行われ、六名の行僧さんは行堂内で書写した撰法華経を首からはずし、参加者の体に当て、身体健全・無病息災等を祈っていた。

法要後、関根教沅宗務所長は御挨拶で、踏めば踏むほど良く育つといわれる麦に譬えて、「何が起こるか判らない世の中ですが、この今の世の中を決して悲観せず、皆でお題目を弘めてゆきましょう。それが大聖人から託された私たちの役目なのです。」と話された。



大祈禱会

続いて会場寺院となった玉蓮寺の阿部是弘住職より、弘安四年「一二八一」創建された玉蓮寺の縁起、由来を紹介頂きましたが、歴史を感じさせる大聖人の御霊跡でありました。最後に加藤会長が挨拶に立ち、「昨年は新潟中越地震やスマトラ沖地震など大きな災害が起こった年でありましたが、我々は自然に対し

でもっと敬意を払うべきではないでしょうか。生かされているという事を感じ、そのありがたみを感じるべきです。限られた生命に感謝し、その感謝の気持ちを念頭に置いて、強い信念を持って頑張っていきましょう。」と訴えかけ、大祈禱会を結んだ。

当日はあいにくの天候でしたが、成満行僧六名を含む県内修法師の加持祈禱と、それを受ける檀信徒の熱気に寒さを忘れる一日でした。参加した檀信徒は足下を気にしながら、皆それぞれに申し込んだ祈禱札を手に帰路についた。

挨拶する加藤会長



なお本年度荒行を成満されたのは、正法寺・宗川円浄上人、上原寺・仁部前崇上人、本泉寺・鷹野善正上人、妙宣寺・梶川善隆上人、性蓮寺・関根教樹上人、妙福寺・樺山経生上人の六名です。おめでとございます。

私の信仰談

お題目に守られて

北本市 善照寺 鈴木清子さん

今から遡ること三十年前のこととです。私たちは家族三人、小さいながらも一つ屋根の下、端から見れば何ひとつ不自由のない幸せな毎日を過ごしているように見えたことでしょう。

しかし、家の中は三車火宅の譬えに漏れず、一人娘は生まれつき体が弱く、通院生活を続けなければならぬ娘の将来を考えると、親としての責任は、心に重くのしかかっていました。

この病院通いはいつまで続くのだろうか、この子は本当に治るのか、大人になってもこの状態が続くのではないか、最悪の場合のこと頭を過り、昼夜を問わず一度もこのことが頭から離れることはありませんでした。

その様な私を見て心配していた姉が、私に「お題目と法華経にお願ひしてみたら」と、当時浦和市にありました善照寺さまを勧めてくれました。

最新の医療設備と経験豊富なスタッフを備えた病院でも、顕著な回復傾向が見られず、どうしようもない気持ちになっていった私は、半信半疑でありましたが、藁をもすがる気持ちで山崎

妙照お上人のご指導を頂き、見よう見真似でお題目を唱え始めました。

お題目に出会ってから、一心に唱えるお題目が仏さまに通じたのでしようか、嘘のように日に日に元気になる娘の姿は、誰の目にも明らかでした。

日課とも言われた通院から解放され、今まで思い悩んだ毎日が嘘のように思われるようになりました。

しかも、それ以来、今日まで娘はもちろんのこと家族は風邪ひとつ引かないほど元気になりました。

医学の力を持ってしても改善の兆しさえも見えない病気がお題目の力で快癒したことは、私たちにあって、まさに奇跡と思える出来事だったのです。

私たちは、善照寺さまからお題目と法華経のご縁を頂き、その力によって誰にもわかってもらえないような苦勞から解放されるのみならず、将来へつながったであろう苦しみからも救われたのです。

これを契機に、身延山への参詣、新春の三ヶ寺参拝を始め、

お寺様の諸行事に積極的に参加するようになり、心がけ、気がつくとい日蓮大聖人様の唱えられたお題目なしの生活は考えられなくなっていました。

「信じる者は救われる」ということばは良く耳に致しますが、いつしかお題目の有り難さを肌で感じ、仏さまを深心より信じている私たちでした。

仏さまに護られて物心両面に順調な私たちでしたが、昨年五月またしても一大事が起こりました。私が近所のお店に買い物に出かけた時のことです。途中の横断歩道を横断中に、間が悪く猛スピードで走行してきたバイクとの接触事故に遭いました。

事故から三時間近く意識不明の状態が続き家族を心配させました。幸いにも一命を取り止めた。けがは右上腕骨複雑骨折のみで、事故の割合には軽く済んだことに感謝をしました。

完治までは約七ヶ月がかかりましたがその後遺症もなく、その間、事故の痛み、手術の痛みなどほとんど感ぜず、病院で苦しんでいる人を見るにつけ、ご守護を再認識した次第です。

「大難は小難に、小難は無難にと」日蓮宗の御祈願の如く救われたのです。

これはまさにお題目のお陰、法華経の力であると信じています。

今でも一大きな事故に遭ったのにどうしてそんなに軽くて済んだの？」と良く人に聞かれますが、そのたびに私は「お題目と、妙法蓮華経如来寿量品第十六を一日一時間朝夕唱え、お題目とお題目におすがりしています。そのため私たち家族はお題目に守られ守護されているのです。」と自信を持って話しています。

お題目にご縁を頂き、お題目と共に歩ませて頂いた三十年お陰さまで家庭は明るく不安のない充実した日々を、毎日感謝の心を持って送っています。

これからも、娘共々山崎お上人をお助けし、善照寺の興隆と、法華経・お題目の流布に少しでもお役に立てればと、精進して参る覚悟です。

【善照寺総代 藤平 孝 記】



仏教質問箱

先日、近くのお寺さんで加持祈禱を受けました。すごい迫力で圧倒されましたが、加持祈禱というのはいったいどんな意味があるのでしょうか？

一般的には加持祈禱は呪文を唱えながら仏様、諸天善神の助けを借りて、守護してもらい護摩を焚いたりして家内安全や身体健全や病氣平癒、厄除け等の祈願をします。

「加」は仏の加被、増加、「持」は衆生の摂持、任持の儀であるとし、仏の大慈悲が衆生に加わり、衆生の信心に仏が応じて道交しあい、そこに即身成仏が達成されるとします。よく祈願の御回向で使われている「感応道交」というのが加持のことになります。加持の目的は、息災（災難を防ぎ、無事を祈る）、増益（生産、財産が豊かになることを祈る）、敬愛（他より信頼や愛を得ようとする祈り）、調伏（怨敵、魔障を退散降伏せしめる祈り）、延命（長く健康で生きたいと言う祈り）などの五種があります。

日蓮宗では宗祖である、日蓮大聖人が教化の一助として加持祈禱をおこなったというのが、御遺文の中に窺えます。例えば伊豆流罪の折に地頭、伊東八郎衛門の病悩

を祈禱したり。（船守弥三郎殿御書）母のために病氣平癒の祈禱（可延定業御書）などおこなってあります。そして日蓮宗といえは木剣を使って

おこなう加持祈禱がありま

す。この加持祈禱は修法師と呼ばれる僧侶がおこないます。修法師とは毎年十一月一日から二月十日の百日間、大本山正中山 法華経寺でおこなわれる「大荒行堂」という所で修行をした者だけに伝えられる秘法を授けられます。なぜこの修行が「大荒行」と呼ばれるほど



体に撰法華経を受ける信者（平成17年大祈禱会）

宗派の修行も厳しいのですが、日蓮宗は伝統的に他の宗派に類を見ない厳しさがあるようです。この荒行の始まりは日蓮大聖人の孫弟子である日像聖人によるものとされています。日像聖人は日蓮大聖人の臨終の際に直々に帝都（京都）開教の遺命を受けた方であり、その帝都開教に向けておこなった修行が壮絶なものでした。

鎌倉由比ガ浜の海に入って『法華経』の自我偈を百巻ずつ読みました。これを百日続け、帝都弘通の大願を祈り、いかなる法難にも堪えうる心身を養われました。これが荒行の元になって現在に至ります。

この修行は「世界三大荒行」と言われるほど大変な修行です。結界といわれる修行僧以外立ち入ることの出来ない修行場で鬼子母神様に百日間命を預けることを誓い、それぞれの鬼子母神様を持ち入ります。一日、七回の水行と読経三昧、一日二回の箸にもかからな

いような薄い粥と底の見えそうなほとんど具が入っていない味噌汁、わずか、三時間の睡眠、白木綿単衣に清浄衣（麻の法衣）寒風吹きすさむ中での厳しい木剣修法の相伝、足は粗むしろですれて大きく腫れ上がり、声もかすれて出なくなり、このような苦修修行をおこないます。行僧には初行（一回目）再行（二回目）三行（三回目）再々行（四回目）五行（五回目）参籠（六回目以上）と六段階に分かれています。祈禱の秘法をすべてマスターするには五回入らないといけません。こうした修行を経て、皆さんへ加持祈禱をするのです。

埼玉県でも毎年、二月の中ぐら

いに修法師会が主催する世界平和祈願式並びに大祈禱会を、その年入行した行僧さんと県内の修法師がおこなわれます。毎年大勢の方が見えられます。是非、皆さんも足を運ばれてみられたらいかがでしょうか。

大聖人・彩の国紀行

第一回

戸田妙顕寺

依智から佐渡へ

今から約七百三十年前の文永八年（一二七一）九月十二日、日蓮大聖人は名越の小庵で捕らえられ、深夜籠ノ口の頸の座につきました。太刀取りの武士が太刀を構え振り上げたその時、突如閃光が走り、江ノ島の方角から「月のようにひかりたる物」が鞠のように飛んできて、兵たちは恐れおののき、大聖人の命を奪うことはできませんでした。世に言う龍口法難です。

翌日、相模国依智（厚木市）にある本間六郎左衛門重連の邸にお預けとなった大聖人は、十月十日、佐渡への流人の旅に発つたのでした。付き従う弟子や護送の一行は、馬の背に乗る大聖人を囲むように北へ向かい、その夜は武蔵国久米河（東村山市）に宿をとりました。

大聖人の佐渡への旅はその後新倉（和光市）から中山道を北上し、十二日をかけて寺泊へお着きになりました。

今回より、大聖人彩の国紀行と題し県内の大聖人の足跡を、

妙顕寺・妙典寺・寶藏寺・調神社・玉蓮寺へと辿っていくことにします。

長誓山 妙顕寺

日蓮大聖人は久米川に御一泊し、その翌十一日に新倉へさしかかられました。領主は、隅田五郎時光で、その時、妻が難産で、生命が危なれていました。

ところが、高僧が通るので、その人にすがるようにとの夢のお告げがあり、到来を待ち望み、街道に迎えを出していたところ、聖人の一行が来た時、迎えの者は、一目でこの方だとわかり、子細を申し上げた。聖人は、「流人のことなれば」と、時光邸へはお行きにならず、近くの泉の水で墨をすり、安産の御符を書いて与えられたといひます。

時光の妻は、たちどころに苦しみが消え、男児を出産、夫婦は、この時から聖人に帰依し、一寺建立の願をたてたという。時が過ぎ、その子が九歳になった弘安二年、父子で身延山に登詣し聖人に再会、ともに出家して、时光は日徳、子（徳丸）



妙顕寺（『江戸名所図会』） 子安の釈迦如来、子安の曼荼羅、四尊に安置す。又堂内の妙符を祀り。

江戸名所図絵（妙顕寺）

は日堅の名を、親しく賜りました。翌三年に父子は身延山を下って新倉に帰り、念願のお寺を建立、山号寺号も聖人に命名いただいたと伝わっております。開祖は、日蓮聖人、開山には、六老僧の日向上人を仰ぎ、日徳

に、戸田の渡しがあつて、交通の要衝でした。江戸時代になるとさらに人々の往来が多くなり、妙顕寺は、子安霊場として発展した。武蔵国一円の地誌である江戸名所図絵にも載せられています。

は三祖、日堅は四祖となられました。妙顕寺が、いま新曾にあるのは、創立から、およそ百年後の至徳元（一三八四）年に、兵火で焼失して、新倉から移って来たからだとはいわれております。

このあたりは、鎌倉時代、佐々目（笹目）郷とよばれ、近くを流れる荒川

本堂に入ると内陣には超特大の三具足の奥に、御宮殿内のお祖師さまを拝む。江戸時代作と



妙顕寺 山門

いう古式ゆかしいもので、さがり気味の太い肩に、大きな目の、大変親しみやすいお顔の等身大のお像でした。その前に安置の子安のお釈迦さま共々、たくさんの女性達の安産祈願を聞きとどけてきたお像であります。

本堂に入つてすぐの欄間には、畳よりも大きな立派な絵馬が、数枚かかげられています。一番大きく目をひくのは、伝統的な大和絵の画法で描かれ子安霊場縁起で、時光が、日蓮大聖人に、祈願している場面の絵です。寺宝には、弘安二年に日徳が、身延で授かった子安曼荼羅、建

治元年十月に書かれたという建治の御本尊の二幅の御真筆御本尊、ほかにも御真筆や、高僧方の書、徳川家から拝領の御朱印状等を格護しております。



妙顕寺 本堂



御朱印箱



子安曼陀羅 (上)



子安霊場縁起絵馬 (右)

編集後記

平成十七年も早三月を迎え、野には緑が芽吹いてきました。川のせせらぎの水かさも増し春の彼岸を過ぎると、農家の方々も忙しくなります。

年年歳歳 花相似たり
歳歳年年 人同じからず

と申します。昨年の後半から国内はもとより海外でも大きな災害が相次ぎ、貴重な多くの人命が失われました。

自然は年ごとに廻って来ますが、そこに生きる人は決して同じではない無常、私たちはお題目の力でこれらに打ち勝ち、娑婆即浄土を実現しなければなりません。

今月から、「私の信仰談」と「大型人彩の国紀行」が新しく始まりました。ご一読下さい。

「弘道」では、皆様からの投稿をお待ちしております。皆様の信仰にまつわるお話をお聞かせ下されば幸いです。原稿は左記迄お願いします。

北葛飾郡栗橋町

北二一五一十二

吉田 卓治 宛